●戦国武将列伝
●覇者への道
シブサワ・コウ著

# 目　　　　次

# ●戦国武将列伝

## 1. 蠣崎　慶広（蝦夷）

1549～1617

祖を若狭の武田信広とする。後，蝦夷に移ってアイヌコシャマインの乱を鎮圧後，蠣崎信広と名乗った。4代め季広は，蝦夷にいわゆる「和人地」を設けて大名領国制を開始した人物で，この頃よりアイヌ人の支持も受けている。

慶広の代になると，豊臣秀吉から蝦夷一円の所領を安堵され，更に徳川家康に謁見し，「松前」と称するようになる。政の中心より離れた地にいながらも，着実な発展を遂げた一族で，漁猟交易の征を収めた武功もあって，蝦夷全土の入口としてその地位を固め，後の徳川幕下松前藩へと引き継がれていった。

## 2. 津軽　為信（陸奥）

1550～1607

南部支族の大浦氏より発した一族で，この為信が津軽氏の祖といわれる。

主家南部氏の津軽支配が衰えたのに乗じて自立し，津軽地方の旧族，豪族たちをことごとく征服，その統一を30歳にして成し遂げた。豊臣秀吉に早くから通じて小田原征伐に功を上げたため，近世大名として津軽藩の基礎が定まる。以後「津軽」を称するようになったが，同氏は関ケ原の合戦では徳川方についている。

## 3. 南部　晴政（陸中盛岡）

1498～1563

清和源氏の血を引き，源頼朝の側近として仕えた南部光行をもって祖とする。

南北朝，室町時代では，津軽盛岡の諸豪族を統制しきれなかったが，24代めのこの晴政の代になると，浪岡氏，期波氏，秋田氏と争って岩手，志和及び和賀の地を手に入れ南部家を優位に導いたのである。やがて，配下の大浦氏が独立したため，津軽地方を失うが，南下して領地を拡張，近世南部藩を確立するに至る。

## 4. 葛西　晴信（陸中岩崎）

1534～1597

祖は源頼朝の奥州平泉攻めの際に武功を上げた葛西清重にさかのぼる。

晴信は，その17代めとして出生し，現在の宮城県東北部から岩手県南部にわたる領土を手に入れるが，大崎氏との国境線を巡っての争乱が絶えず続く。こちらは，葛西氏が優勢であったが，同氏の内部事情は極めて不安定で，家臣の内乱には始終悩まされ続けていた。やがて，伊達氏，大崎氏と同盟を結んで葛西氏に平和が訪れたかに見えたが，秀吉の小田原征伐に参陣しなかったため没領，加賀に逃れている。ここで葛西氏は断絶し，晴信は最後の当主となったのである。

## 5. 秋田(あきた)　愛季(ちかすえ)（羽後(うご)）

?～1587

「秋田」の称号が固定するのは，同氏が近世大名として発足してからであり，戦国時代には「安東(あんどう)」と呼ばれていた。

檜山(ひのきやま)安東家と湊(みなと)安東家の合併を果たし，相続したのがこの愛季で，居城を男鹿脇本に定める。愛季は，戦国大名としての秋田氏初代として，その子実季と共に同氏の全盛時代を築いた。浅利氏，南部氏を攻撃し，その領地秋田，檜山，比内3郡を占領して秋田家領国の基盤を確立する。

## 6. 伊達(だて)　輝宗(てるむね)（陸前(りくぜん)）

1543～1585

本姓は藤原氏と名乗り，遠祖は藤原鎌足(ふじわらのかまたり)に発する。

輝宗は伊達氏16代めに当たり，足利将軍義輝より一字を授かって出羽米沢城主となる。家臣の内紛を治め，外には畠山，最上，相馬氏と戦う。後，畠山義継と講和するが，会談後，義継が輝宗を拉致(らち)しようとしたので子政宗(まさむね)が駆けつけ，泣く泣く父もろとも義継を討ち果たす。これが後に独眼竜(どくがんりゅう)といわれ，伊達氏を代表する英雄となった政宗である。政宗の力によって，伊達氏はその領地を，仙台を中心とした東北一円に広めていく。

## 7. 最上　義守（羽前）

1521～1590

最上氏初代兼頼は斯波氏の一族で，現在の山形県に起こった。

義守は，山形城に居を構え，2歳にして最上氏10代を相続。上杉氏，伊達氏と覇を競ったが，子義光の代になると葦名氏，佐竹氏と同盟を結んだ上，伊達氏を包囲する戦略をとった。この争いの前に，世子相続問題で義光と争って隠退しているが，反義光の動きが起きると，その中心となって自分の息子に刃を向けるのである。

## 8. 結城　晴朝（磐城）

1533～1614

頼朝の側近小山朝光が，志田義広の乱の功により下総国結城郡を与えられ，移り住んだのが始まり。

父政勝の死後，結城17代の家督を継ぐ。常陸，下野を拠点とし，最初は北条氏康・氏政，後に上杉謙信と結ぶなど，さながらカメレオンのように離合集散を繰り返し，両氏勢力の均衡を巧みに利用，結城氏をよく存続させていく。謙信死後は，北条氏の一斉攻撃をを浴び，一族滅亡の危機に瀕するが豊臣秀吉の私戦禁止令に背いた北条氏は滅亡。晩年は越前に移り，結城への帰城を願いつつ死に至る。享年81。

## 9. 葦名　盛氏（岩代）

1521～1580

葦名氏は本姓平氏で，相模国を領した三浦一族の出身。鎌倉期に会津守護と称して下向し，相模葦名荘に拠って葦名氏と名乗る。

16代め当主に当たる盛氏は，北条氏康（氏政の父），武田信玄，上杉謙信らと通じ，畠山義継を初めとする近隣諸豪族を討ち，しばしば常陸に構える佐竹氏とも争った。当時の幕府の記録には，奥州大名として，伊達，葦名の2氏だけが記されており，その領土は会津一円，越後にまで及ぶ。葦名氏は文字どおり，この盛氏の時世が最も栄え，名実共に伊達氏と並び称される東北地方屈指の戦国大名であったといえよう。

## 10. 上杉　謙信（越後，上野）

1530～1578

越後の守護代長尾為景の3男として生まれ，景虎と名乗って長尾氏を相続，後関東管領山内上杉氏の家名を継ぎ，剃髪して謙信と称した。その父為景は，16歳で初陣して以来，一生涯に戦うこと百余度，戦の鬼とうたわれた。

14歳の時，越後中郡の反乱を静め，武名を揚げる。これを妬んだ兄晴景と，一族を分けての戦いをおこしたが，謙信派が勝利を収め，ついに，越後一国の支配に乗り出すことになった。やがて甲斐の武田信玄と，川中島を挟んでの合戦が始まる。史上名高いこの合戦は5回に及び，川中島第4回戦では，「啄木鳥の兵法」を見破った謙信が信玄軍に迫り，両雄の一騎打ちが行われた。これを俗に「三太刀七太刀」という。後，毛利輝元と結んで織田信長に対抗し，天下統一を夢見るが，志半ばにして世を去る。享年49。

その人柄は，勇敢，無欲，器量広大で「戦国の末世に有難き名将」と絶賛されること，しばしばである。

## 11. 佐竹　義重（常陸）

1547～1612

源義家の弟を祖とし，頼朝軍に大敗するが，辛うじて常陸一国をその領土とする。

義重は元服前よりその才を発揮し，家臣に所領をわり与えるなど領主としての行動を見せている。実権を握ると，まず諸氏を排斥し，領土を常陸，下野，奥州の仙道，会津方面にまで拡張を図る。北条氏の北進，武田信玄の東進にそなえ，上杉を離反して信玄と結び，謙信と北条が同盟すると謙信になびいた。このあたりに勢力拡大を図る佐竹氏の前途の険しさがうかがえる。しかし義重は，上杉，北条，武田三氏の勢力均衡の間を巧みに動き回った。一方，奥州では伊達氏の勢いが強大化し，伊達政宗と人取橋で戦うが，ついに決着のつかぬまま義重は死去。66歳。

## 12. 宇都宮　広綱（下野）

1543～1580

京都の中流貴族中原氏一族よりの出身。

父尚綱の戦死後，6歳で宇都宮当主となり，かねてから敵対関係にあった那須氏との間に，重臣の尽力もあり一応の区切りをつける。が，宇都宮家中をのぞけばここにも問題は渦まいており，更には，近隣の北条氏康と上杉謙信の対立と，広綱には頭の痛いことばかりであった。助けを求めるべく佐竹氏と結び，この困難な情勢を乗り切ろうと共に上杉方に属した。領土拡張に成功しているが若年にして死去。

## 13.　里見（さとみ）　義堯（よしたか）（安房（あわ），上総（かずさ））

1507～1574

「南総里見八犬伝」で名高い里見氏である。

結城の乱の際，結城氏に味方して安房に敗走したのが安房里見氏の始まりといわれる。里見氏は，度々三浦半島を経て関東に侵攻したため，北条氏との激突を余儀なくされ，ついには国府台合戦に発展している。しかし，北条氏による房総半島侵略が行われている限り，房州に平和は訪れないのである。意を決して再び義堯は立ち上がる（第2次国府台合戦）が，奇（く）しくも義堯没後に，里見，北条両氏の和睦が成っている。

## 14.　北条（ほうじょう）　氏政（うじまさ）

（武蔵（むさし），伊豆（いず），相模（さがみ），下総（しもうさ））

1538～1590

戦国乱世の中で，5代に渡りその覇権を維持した大名は数少ないが，早雲発する北条氏は100年もの間関東を治めた。

氏政は，小田原城を本拠にその全盛を築いた北条氏康（うじやす）の嫡子。今川氏，武田氏と婚姻関係をもって和を結ばんとし，武田信玄とは，その娘を妻に迎えて同盟している。しかし，戦国の世の習いでこの和も長く続くことはなく，舅（しゅうと）信玄と激しく争うことになるのである。

その才能は凡庸で，父氏康は，「家臣の忠奸も見分けられない器量」と嘆き，果して，1575年，小田原は豊臣秀吉に囲まれ，「小田原評定」を重ねたあげく，滅び去っていく。

## 15. 武田(たけだ) 信玄(しんげん)（甲斐(かい)，信濃(しなの)）

1521～1573

甲斐の虎といわれ，人々から恐れられた信玄は，清和源氏の血を引く甲斐国の守護武田氏に生まれ，晴信(はるのぶ)と称した。壮年になると，父信虎(のぶとら)を追放，甲斐国を我がものとする。更に相模の北条，駿河の今川と三国軍事同盟を結んで後顧(こうこ)の憂(うれ)いを断ち，信濃計略に乗り出した。そうはさせじとこの前に立ちはだかったのが，越後の上杉謙信，川中島5回戦の幕明けとなる。戦果は5分5分に終わったが，その間信玄は，信濃の大部分を手に入れることに成功，駿河，三河へと討って出，西上の途に就くのである。三方ガ原にて織田信長の援軍を得た徳川家康軍と衝突するが，これを散々に討ち破り，三河野田城をも奪取する。しかし，忍びよる死には勝てず53歳で没す。

この信玄の死を最も悼(いた)んだのは，宿命のライバル上杉謙信であったろう。謙信は，5年後，後を追うように息を引き取っている。

信玄の子勝頼(かつより)には才がなく，長篠の合戦では，鉄砲隊を巧みに操った信長の前に武田の誇る騎馬隊も力及ばず，滅亡していく。

## 16. 畠山(はたけやま) 義綱(よしつな)（能登(のと)）

？～1593

室町時代より力を奮った管領家畠山氏の有力庶流，能登守護畠山家の血を引く。

義綱は，父義続(よしつぐ)の引退後，七尾城主となる。当時，能登国では，重臣畠山七人衆が主導権を掌握していたが，やがて分裂し，この頃から義綱の戦国大名としての台頭が著しくなるのである。土豪層を雇うことにより，軍事力の増強を図って一族を統一，一時は義綱専制が成立するが，出る杭(くい)は打たれ，追放される。義綱は，七尾城奪還のために執拗な攻撃を繰り返すが，ついに実現せず，逃亡先近江にてその波乱に富んだ生涯を閉じている。

## 17.　神保(じんぼ)　氏張(うじはる)（越中(えっちゅう)）

？

鎌倉に出て畠山氏に仕え，畠山基国が越中を領するようになるとこれに従って同国に入国，神保氏発展の礎(いしずえ)を築いた。

氏張も，初めは畠山氏の被官であったが，上杉謙信に属し，佐々成政(さつさなりまさ)の与力となっている。早くから織田信長，徳川家康に仕え，その子孫氏長(うじなが)は徳川幕臣となって一族は続いていった。

## 18.　姉小路(あねこうじ)　自綱(よりつな)（飛騨(ひだ)）

1540～1587

名を頼綱としている史料もある。もと三木氏の一族で，国司姉小路氏に代わって飛騨高山城主となった。柴田勝家を討ち滅ぼした（賤ケ岳(しずがたけ)の戦い）豊臣秀吉に対して，北陸の佐々成政と共に抗するが敗北に甘んじている。飛騨一国と息子2人の命と引き換えに生きながらえるが，まもなく京都にて48歳で病没。

## 19.　木曽(きそ)　義昌(よしまさ)（木曽(きそ)，福島(ふくしま)）

1540～1595

鎌倉期に活躍した木曽義仲(よしなか)の子が，義仲滅亡時に逃れてきたのが始まり。

天険の要害と豊かな山林資源を背景とする木曽谷を統轄し，近隣にその覇を唱えた義昌は，木曽家が甚だ不利な状況下にあった時分に生まれ育った。父義康(よしやす)が武田信玄に破れたのである。義昌は信玄の三女を正室にめとり，武田氏の信濃先方衆としての軍役を負った。

信玄の死後勝頼が織田信長に破れると信長に応じ，ついに武田を離反，これを撃破している。後，豊臣秀吉，徳川家康両者間を点々とし，結局家康の傘下となり，これによって木曽谷における独自の戦国大名ぶりは抑制され，封建制の新秩序の中へと組み敷かれていくのである。

## 20.　今川（いまがわ）　義元（よしもと）（遠江（とおとうみ），駿河（するが））

1519～1560

室町幕府，足利将軍の支流にあたる。「海道一の弓取り」とうたわれ，文武両道を重んずる家風の中で義元は生まれ育つが，家督相続の争いに巻き込まれ，肉親の血の洗礼を受けた後，戦国武将への道を歩む。これは何も義元に限ったことではなく，肉親あい食む葛藤は，他の多くの戦国武将が被（こうむ）った試練なのである。

武田氏と婚姻を結び，三河の松平氏から世継ぎ竹千代（たけちよ）（後の徳川家康）を人質にとり，和を結んだ。西進策を引っ下げて上洛途中，桶狭間で，見事という他ない織田信長の奇襲にあい，そのあえない最後を迎える。

尾張の「大うつけ」の田舎大名と信長を侮（あなど）った義元の手落ちと同時に，信長の抜きんでた敏速さによるものであった。

## 21.　本願寺（ほんがんじ）　光佐（こうさ）（加賀（かが））

?

戦国時代は，群雄割拠（ぐんゆうかっきょ）の世と言われるが，一向一揆もまた盛んに起こった時世でもある。両者は相関関係にあるといえるが，光佐の領国加賀も石山本願寺の一向一揆として名高く，度々織田信長の攻略を受ける。信長は，仏教と政（まつりごと）とが密着するのを極端に嫌い，現に延暦寺を山ごと焼き討ちにしている。かくして三好一党と手を結んだ光佐は，浅井・朝倉両氏を助けつつ10年間に渡り信長と対戦している。

## 22. 朝倉（あさくら） 義景（よしかげ）（越前（えちぜん））

1533～1573

越前一乗谷城主，朝倉教景（のりかげ）の子。足利義昭は，上洛の軍を起こすよう朝倉家を頼ってきたが，加賀，能登の一向一揆と対陣していたこともあり，その要請に応えられなかった。後，義昭は織田信長によって室町幕府15代将軍に就任しながらもこれに疑心を抱き，再び諸国の有力大名に信長追討の呼びかけを行う。これに応じたのが義景で，事実を知った信長は憤怒し，一乗谷にせまるのである。

一度めは，浅井長政の信長離反により事無きを得たが，次に姉川に戦って，義景は壊滅的な敗北を受ける。三度め，ついに盟友浅井長政もろとも滅び去っていくのである。

## 23. 斉藤（さいとう） 義竜（よしたつ）（美濃（みの））

1527～1561

美濃国守護で，稲葉山城を居城とした斉藤道三（どうさん）の嫡子。灯油の行商人から，一国の大名にのし上がった道三には，正に，下剋上の戦国乱世をまざまざと見せつけられるようである。

しかし，義竜の母はもと道三の仕えた土岐氏の妾で，道三は，義竜が実子であるかどうかを疑い，ことごとく疎（うと）んじたという。これを恨んだ義竜は，2人の弟（道三の実子）を殺し，更には，怒った道三と長良川で対戦，舅の応援に駆けつける信長を待たずに，義竜は父道三を討ち果すのである。後に舅の弔（とむらい）合戦と称した信長の美濃攻略軍に攻められるが，義竜は稲葉山城を強固に守って落ちない。しかし，その子竜興（たつおき）は無能で，まもなく美濃は信長の手に落ちていくことになる。

## 24. 徳川　家康（三河）

1542～1616

豊臣家を滅ぼして徳川300年の基を築いた徳川家康は，松平広忠を父とし，岡崎城に生まれた。広忠が今川氏の保護を受けたため，家康は成人までの日々を同氏のもとで人質として送っている。今川義元が桶狭間に討死するや，独立して織田信長と結んでいる。当時，これもまた天下統一の野望を抱き，信長と対立関係にあった武田信玄と三方ケ原に戦って，この時家康は大敗，命からがら浜松城へ戻ってみると失禁していたというエピソードが伝わる。あの家康が，である。その後も信長と共に，長篠の合戦，天目山の戦いと勝利を収め，駿河一国を与えられている。信長の死後は，豊臣秀吉に臣下の礼をとり，江戸城に移る。その秀吉が死んでしまうと家康の僭上ぶりは次第に甚だしくなり，やがて日本中を東西真っ二つに分けた関ケ原の戦いを迎えるのである。豊臣方武将石田三成も必死に抗したが力及ばず，この勝利によって家康の勢威は並びのないものに成長していく。1603年，征夷大将軍に任命され，幕府を開設，揺ぎのない徳川天下をここに確定した。大阪冬の陣・夏の陣を経て，75歳の老齢で死去。

しかし，家康は，その非情さと狡獪のために，人に愛されなかったという。

## 25. 織田　信長（尾張）

1534～1582

織田氏は斯波氏の守護代として，代々尾張に勢力を張っていた。

父備後守信秀の3男として那古屋城に出生し，幼名を吉法師，元服すると織田三郎信長と名乗る。形式にとらわれず，卓抜したアイデアと斬新さを持つ信長の風体と行動は，人人の目には異様に写り，近国の者は口をそろえて彼を「大うつけ者」と評した。こんな信長も，次第に野心に燃える気鋭の青年武将としての頭角を表わし，美濃の斉藤道三との同盟，織田一族の統一，次に今川義元を桶狭間で見事な奇襲戦で討ち取るなど東奔西走した。信長を「大うつけ者」と嘲笑した者は全て皆，彼に見事に欺かれたことになるのである。やがて，徳川家康，浅井長政，武田信玄らと同盟を結び，足利15代将軍義昭を奉じて入京する

に至る。しかし，義昭をないがしろにしようとしたため，将軍の呼びかけに応じた朝倉義景とその盟友浅井長政と姉川で決戦。一旦は和睦するが，後に朝倉氏は一乗谷にて，浅井氏は小谷城で滅亡している。武名高い武田氏もまた，信長によってひねりつぶされた一族である。

偶像破壊者で，比叡山延暦寺を焼き討ちにしたのも，一向一揆をことごとく掃討したのもこの信長である。正に飛ぶ鳥を落とす勢いで諸国を平らげ，中国出陣を目前にした49歳の盛夏，本能寺で没。重臣明智光秀(あけちみつひで)の刃の前にその非凡な一生も終わりを告げた。

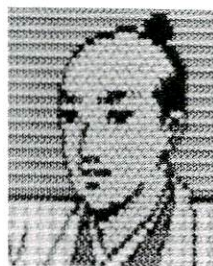
## 26. 北畠(きたばたけ)　具教(とものり)（伊勢(いせ)，志摩(しま)）

1528～1576

北畠氏の家系は村上天皇の息子に発し，後源姓を与えられた村上源氏(むらかみげんじ)の一流。後醍醐天皇の重臣として仕えた者もいる名家である。

具教は，伊勢国司家を継ぎ，折しもその勢力が伸び始めたため勢いに乗って南伊勢に長野氏，北伊勢に関氏と戦うが，後織田信長による伊勢攻めにあう。伊勢は信長の嫌った一向衆徒の巣だったからである。具教は一族の興亡をかけて必死に応戦，信長の３男信雄を養子にすることで和議へと持ち込むが，最終的にはこの信雄に殺され，ここに伊勢国北畠家は滅亡するのである。

## 27. 浅井(あさい)　長政(ながまさ)（近江(おうみ)）

1545～1573

赤松満祐(あかまつみつすけ)が足利６代将軍義政を謀殺した嘉吉の乱の際に，近江に配流された藤原公綱(きみつな)の子孫がその始祖だという。

長政は，15歳で元服し，早くにその将器のあることを敏感に察知した家臣は「亮政殿の御孫(おんまご)らしい」と期待をかけた。というのは，俗に浅井３代というが，これは亮政(すけまさ)，久政(ひさまさ)，長政のことをさし，長政の父である久政は，武将としての器量がひどく劣っていたということである。こうして浅井家を継いだ長政は，やはり怒濤(どとう)の勢いで領国拡張の道を突っ走

る信長の妹お市をめとり，同盟を結んだ。その後信長が，長政の盟友朝倉義景を討たんとしたため，この同盟は破約，義理に厚い長政は，朝倉勢に味方する。信長は，長政の離反を怒って浅井・朝倉攻略を開始，姉川の戦いを迎えるのである。3年後，ついに近江小谷城は落城。長政は自刃する。

信長は，木下藤吉郎（後の豊臣秀吉）に命じ，妹お市と彼女の生んだ3人の娘茶々（後の淀君），おはつ（後の京極高次夫人），お江（後の徳川秀忠夫人）を救出することを忘れなかった。

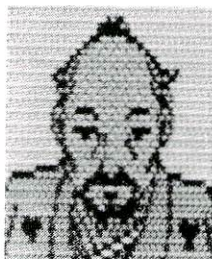
## 28. 六角　義賢（伊賀）

1521～1598

一般に，宇多天皇の末裔が近江佐々木荘に居を構えた佐々木氏の嫡流といわれる。このため，佐々木六角氏とも呼ばれる。

義賢は父定頼の死によって31歳で，家督を相続。法名の承禎の名が広く知られているが，義賢の一字を足利義輝から授けられているように，常に将軍家を擁したことは有名である。まず，将軍義晴を助け，これを阻む三好長慶と戦い，今度は義輝を保護して京都白河にて同じく長慶と刃を交えた。義輝を京に還住させることに成功。しかし，足利義昭を奉じて上洛する織田信長には降伏，後，三好氏，浅井氏らと組んで南近江の織田方武将柴田勝家を攻めるが失敗，信長の前にひれ伏した。

## 29. 一色　義道（丹後，若狭）

？～1579

足利泰氏の5男が，三河吉良を本拠として一色と称したのに始まる。

義直以降は丹後をその拠点とし，群雄割拠の世を生き抜いてきた。義道が丹後国主になった頃は，すでに室町幕府足利将軍家の権威は地におちていたが，15代義昭の頼った織田信長も大義名分だけに将軍家を利用，怒った義昭が次に落ちついたのがここ一色義道のところである。義昭を食客に迎えるのは，信長に敵対することと同じであった。細川藤孝・

忠興父子，明智光秀と戦うが次第に孤立無援となり，ついには家臣の裏切りにより止むなく自害して果てるのである。

## 30.　波多野　秀治（丹波）

?～1579

一説には，相模国波多野庄に住んだ藤原秀郷の末裔という。応仁の乱では細川方に属し，丹波国を与えられた。

秀治は，波多野晴道の子として生まれ，松永久秀に奪われていた丹波八上城を奪回して居城とする。織田信長方武将，明智光秀による丹波攻略を受けると，これに対抗，八上城に籠る。光秀は自ら母を人質に差し出して，波多野兄弟の命乞いをするが，信長はこれを一蹴，2人を磔に処す。八上城の将兵は怒って人質の光秀の母を殺し，総攻撃に出るのである。光秀の面目は丸つぶれで，これが後に本能寺の変を引き起こす一因になったという。

## 31.　足利　義昭（山城）

1537～1597

室町幕府15代並びに最後の将軍となったのがこの義昭である。兄義輝が，松永久秀，三好三人衆に謀殺されると，その凶刃から逃れるため諸大名のもとを点々とし，後，越前の朝倉家に身を寄せた。なかなか挙兵しない義景に，しびれを切らした義昭が次に目をつけたのが，織田信長である。何事にも迅速を好む信長は，義昭を奉じて入京，義昭はめでたく15代将軍の座にのし上がるのだが，信長は，その座を次第に実権の伴わないものとし，自ら政権を掌握し始めた。この信長の野望を知った義昭は，諸国の大名に中央の実情を訴え反織田同盟を企む。

挙兵はしたものの，義昭にとって信長はとうていかなう相手ではなく，降伏，ここに室町幕府が終わりを告げた。

## 32. 筒井　順慶（大和）

1549～1584

大和国筒井の城主で姓は藤原と称す。大和一帯にその勢力を広げ，松永久秀とは長く確執が続いていた。明智光秀のとりなしにより織田信長に従軍，久秀の謀反の際は，その先導をなして滅亡に追いやり，武功を上げる。本能寺の変の後，頼みの綱をことごとく失った光秀は順慶を頼ったが，彼の思案は濃く，援軍は送っていない。このため光秀は，惨敗を被ることになる。36歳で病没。

和歌，茶道に通じた文化人で，戦場に赴く恰好は，猖々の皮の縁のついた頭巾に金襴のお守り袋を肩から斜めに掛けていたという。

## 33. 三好　長慶（摂津，和泉，河内）

1522～1564

三好長慶は，家臣の松永久秀と共に，「戦国の奸雄」「下剋上の代表者」とよくいわれる。事実，史書にその悪名を馳せてもやむを得ない行いをしているのである。細川一門のうち阿波細川家を継ぐ三好家に生まれた長慶は，幼い時分より家中の相続争いを眼のあたりにしてきた。父をも失っている。彼自身も一族の者を次々に葬り，13代将軍義輝をいただき，新管領に息のかかったものを配して幕府の実権を自分で掌握してしまうのである。が，ここは戦国乱世，幕府第一の実力者長慶を倒さんとする者が現れても不思議ではない。松永久秀がこの役に当たる。後，43歳にて病没。奸臣久秀による暗殺ではないか，ともいわれるが，定かではない。

堺の町の財力をバックにしたこと，貿易関係に目をつけていたことが彼の成功の一因といえよう。

## 34. 堀内　氏善（紀伊）

1549～1615

織田信長に仕え，紀伊2万石を与えられて新宮城主となる。明智の乱による山崎の合戦では，豊臣秀吉に属して武功を上げ，後7千石の加増を受ける。秀吉軍による数々の合戦に参陣し，豊臣家より名刀をも賜わるほどであったが，関ケ原の戦いで西軍主力の崩壊を聞くや否や熊本に逐電す。67歳で死去。彼もまた，戦国乱世に弄ばれた武将の1人である。

## 35. 山名　豊国（因幡，但馬，美作）

1548～1626

清和源氏の出の新田氏を祖とする。新田義範が上野国山名郷に住んで山名氏と称したのが始まり。後京都に進発，室町期には細川氏と共に，管領家の座を争って応仁の乱を引き起こした張本家である。

豊国は，茶の湯，連歌，古典にも通じた教養人であったが，戦国乱世に出生したからには，その習いに従わざるを得ず，戦国乱世へと身を投じるのである。尼子勝久を支援し，鳥取城にその本拠をすえて因幡統治をすすめ，自国安泰を計るために但馬の山名祐豊と共に毛利と和睦している。しかし，織田信長に対抗したため，信長中国攻めの先鋒，羽柴秀吉に鳥取城を包囲され降伏。豊国が退去した後の鳥取城では籠城を決意，史上最も凄絶を極めたといわれる籠城戦，鳥取城の攻防が始まるのである。関ケ原の合戦では豊国は，徳川家康に従って勝利を収め，後にこの御伽衆にまでなっている。

## 36.　別所　長治（播磨）

1554～1580

赤松氏の一族を引き，この長治で播磨三木城最後の城主となる。

長治が家督を継いだ頃，飛ぶ鳥を落とす勢いで天下統一に乗り出した信長の遠征を，ここ播磨にも受けた。羽柴秀吉を総大将とした軍勢は，三木城を包囲して兵糧攻めを開始，頼みの毛利勢は秀吉に阻まれやって来ない。かくして餓死線上をさまよう壮絶な籠城戦となったのである。人々は草の根や木の皮は勿論，軍馬まで殺して飢えを凌いだと伝えられる。２年後，長治の自刃によって，三木城は陥落するのである。「もろびとの命に代わる己れの身」と覚悟しての処置であった。

## 37.　尼子　晴久（出雲，伯耆）

1514～1562

実にこれだけの盛衰興亡の物語をつづった戦国大名は他に類を見ないであろう。

晴久は，尼子氏政権衰退期に出生した。尼子氏は，晴久の祖父経久の時代に最も栄えており，毛利元就を味方として大内義興を攻め，備後，石見に勢力を張った。やがて毛利の大内義興への従属と経久と興久の内部争いにより，尼子家の前途に暗雲がさしはじめ，更には晴久の毛利敗北で尼子氏の中国地方における位置を決定的に変えた。政権喪失の憂き目を見たのである。安芸も備後も失ない，幕府より出雲，隠岐など８カ国の守護を命ぜられたが実の伴わないもので，次の勝久の代で，尼子氏は滅亡，以後，政治の表には二度とその名は馳せていない。

## 38. 宇喜多(うきた)　直家(なおいえ)

（三備(さんび)：備前(びぜん)，備中(びっちゅう)，備後(びんご)）

1530～1582

祖は，鎌倉期に備前児島の地頭に任ぜられた郷守という。その後裔が，同国宇喜多に移住，これを名乗った。

名城岡山城を築いたのはこの直家で，ここを拠点とし，岡山周辺を従えていく。ついには，主家浦上氏を滅ぼし，備前，美作をも手中に収め，瀬戸内海に面したこの三備を勢力下に置く戦国大名にのし上がった。乱世において，その変わり身の速さには定評があり，信長による中国征伐の際には，時には西の毛利に，時には東の織田に通じいかにも戦国の謀将らしいところである。その子秀家は，豊臣秀吉のおめがねにかなって備前・美作を中心に 57 万石の大名となった。

## 39. 毛利(もうり)　元就(もとなり)

（安芸(あき)，長門(ながと)，周防(すおう)，石見(いわみ)）

1497～1571

郡山城主毛利弘元(ひろもと)の 2 男として生まれ，一族兄弟を殺戮した後，毛利当主となる。この思いは元就の一生涯ついてまわり，臨終の枕元には 3 人の子を呼んで，「三本の矢も一本ずつ折れば造作ないが，三本一緒となると容易には折れない」と兄弟力を併せて戦うように訓戒したという。元就はまず，当時大内氏と尼子氏の 2 大勢力に占領された中国地方の統一を目指し，思案の末，尼子氏を背(そむ)き大内義隆に服属する。更には小早川家に隆景(たかかげ)を，吉川家には元春(もとはる)を送り込み婚姻による和を結んだ。この 2 子は後に「毛利の両川(りょうせん)」とうたわれ，毛利の武名を更に高めることになる。

元就の戦法の特色は戦の前にスパイを，時には相手方の間諜までも巧みに利用してしまうことであったと言える。史上名高い，厳島(いつくしま)の合戦もこの例にもれず，相手方陶晴賢(すえはるたか)を翻弄し，厳島大勝を収めるのである。出雲の尼子氏を落としたのもまた，元就の秀(ひい)でた術策によるものだといえる。正に信玄と並ぶ稀代(きだい)の謀将と断言できよう。

## 40.　十河　存保（讃岐）

1554～1586

細川家家臣三好義賢の子。十河一存の養子となり，讃岐十河城主を継ぐ。実兄三好長治の死により阿波が乱れ，長宗我部元親の阿波併合攻撃を受けるが，織田信長に救援を求めて事無きを得，信長の四国征伐の折にはその先鋒を務めている。本能寺にて信長が横死すると秀吉につき，四国征伐，九州征伐共にその先駆をなしたが，豊後戸次川にて戦死。33歳と短いが，波乱の一生を終える。領土は，讃岐十河３万石を安堵された。

## 41.　細川　晴元（阿波）

1514～1563

足利義康の子孫が承久の変後，三河国に住したのに始まり，その後守護として赴いた畿内，中国，四国でそれぞれ細川氏と名乗る。晴元は阿波守護家を嫡流とした。

足利義維と共に和泉の堺で管領となり，堺幕府の中枢を握る。敵対関係にあった細川高国，三好元長を滅ぼして晴元政権を確立，畿内政治に力を入れ，完全に政権を掌握したかにみえたが，三好長慶擁する細川氏綱（高国の養子）に攻められたため義輝を連れ近江に逃れている。名誉挽回を計れぬまま，死去。

## 42. 河野　通宣（伊予）

?～1581

饒速日命を始祖とする説が有力。河野氏は代々長宗我部元親と戦っており，通宣の代も例にもれず，この侵略を受けた。更には豊後大友義鑑・義鎮の侵入，国内では家臣達が反乱を起こすなど，前途多難で，対応策を講じるうち次第に河野氏の衰亡も近づきつつあった。通宣が死去し，通直の時代になると豊臣秀吉による四国征伐が始まり，これに対峙，最後の抗戦むなしく降伏している。このため河野氏の領土は，秀吉軍の先駆をなした小早川隆景に与えられたのである。

## 43. 長宗我部　元親（土佐）

1539～1599

その家系は秦の始皇帝12世の孫にまでさかのぼる，といわれる。

元親は野の虎と恐れられた，長宗我部国親の嫡子として生まれたが，「この親にしてこの子」とはいかず，元親は色白で背ばかり高く「姫若子」などと噂されていたが，初陣では予想以上の成果を収めた。「姫若子」は子を思う父の巧みな演出だったようである。四国統一を目指す元親は，まもなくその念願を果たすが，器は豊臣秀吉の方が大きかったようである。元親が四国を平らげると同時に，秀吉の攻撃を受け完敗。織田信長が評したという「あれは鳥なき島のコウモリ」はまんざらでもないらしい。秀吉に，土佐一国だけは安堵され老齢を過ごした。

## 44. 一条(いちじょう)　兼定(かねさだ)（土佐中村(とさなかむら)）

1543～1585

一条家は藤原北家で，摂関家の九条道家の子実経(さねつね)によって創設された。

兼定は，一条家を継いだ当初は，長宗我部氏と安芸氏の間を斡旋(あつせん)したり，伊予の西園寺と交戦するなど政治，軍事上の活動を示したが，やがて政治に飽きると軽薄で礼をわきまえぬ行動をとるようになり，領国を追放されている。その頃一条氏は，長宗我部元親の攻撃を受けるなど，苦境に立たされていたのである。失脚した兼定は，大友宗麟を頼って豊後，次に伊予へ落ちて行きまもなく没している。これに乗じて長宗我部氏は，土佐中村に攻め入って更にその所領の拡大に成功した。

## 45. 城井(きのい)　鎮房(しげふさ)（豊前(ぶぜん)）

1536～1589

先祖を下野宇都宮氏の一族に持つ。

豊前城井館を拠点とし，黒田如水(くろだじょすい)と度々兵を構えるが，これは後に豊臣秀吉より和睦停戦の命を受けている。しかし，鎮房は如水の謀略にかかり，中津川城にて誘殺さる。彼を油断させていたのは、自分が如水の娘を妻としているという意識であった。戦国乱世においては、このように自分の娘もまた大切な武器になり得るというわけである。

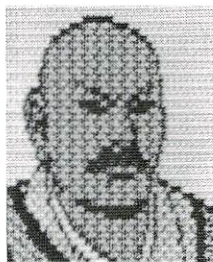
## 46. 竜造寺　隆信

（筑肥：筑前，筑後，肥前）

1529～1584

戦国時代，九州は4つの勢力に塗り分けられており，周防の大内，豊後の大友，肥前の竜造寺，そして薩摩の島津4氏であった。このうち，1560年頃最も活躍したのが，この竜造寺隆信である。竜造寺家は，水ケ江竜造寺と村中竜造寺に分かれ，隆信は水ケ江家3代めの長子として誕生，「大器の素質をはらんだ相」といわれた通り世継ぎとなる。大内義隆に通じた時期もある。やがて，大友宗麟と敵対し佐賀城に度々攻撃を受けるが，都度，家臣の鍋島信生の奮戦で危機を救われている。後，大内氏とは和睦。豪将であったわりに死に様はあっけなく，島津氏の家臣の鉄砲玉に倒れた。享年56。

## 47. 大友　宗麟（豊後）

1530～1587

宗麟は後の法名で，大友義鎮という。豊前豊後守護職を21歳で継ぐのだが,家督相続の争いはここも避けては通らず，流血の悲劇は免れなかった。異母弟到明の守役が大友家の重臣を殺し，重臣達は主人とその愛妾を殺し…。こうして，大友家を継いだ宗麟は，九州の北部中部の殆どを手に入れ，更には，西の竜造寺氏，南の島津氏を討伐すべく両氏と攻防を重ねる。しかし，いずれも決定的な戦果は得られず，宗麟の名を武将として高めただけにすぎなかった。

大友宗麟といえば忘れてはならないのが，キリシタンとの関係で，自らも洗礼を受けキリシタン保護者となった。が，信仰心によるものではなく，西洋の武器を入手するという邪悪な思惑によるものだといわれる。58歳で没す。

## 48. 阿蘇(あそう)　惟将(これまさ)（肥後(ひご)）

？～1583

阿蘇山頂の噴火口を神霊とし，阿蘇社を創設した阿蘇一族は，奈良時代からの名家。南北朝時代には，北条氏を倒す程の勢力を持ったが，後分裂，戦国時代には大友義鑑(よしあき)の意のままに動かされる程，その勢力は後退する。更には島津氏の圧力を受け，これに降伏。試練は重なって，豊臣秀吉の支配をも受けるなどかつての栄華は見る影もなく，後は阿蘇神社神主としての地位を保持するに過ぎなかった。

## 49. 伊東(いとう)　義祐(よしすけ)（日向(ひゅうが)）

1512～1584

藤原南家の血を引く木工頭(もつこうがしら)として発し，伊東庄に住む。このうちの一家が日向系伊東氏となった。足利尊氏に仕えた頃よりその勢力は次第に強大化し，義祐の代になると，かねてより対立関係にあった飫肥(おび)島津氏が降りて，更に伊東氏の領土は増えることになる。義祐の子祐兵(すけたけ)は，大友宗麟と連合し，島津義久と戦うが破れ，その後は豊臣秀吉に仕えている。

# 50.　島津(しまづ)　貴久(たかひさ)（薩摩(さつま)，大隅(おおすみ)）

1514～1571

戦国島津氏は，伊集院一宇治城より鹿児島内城に移り，約38年間，豊臣政権に組み敷かれるまで戦国大名として華々しい活躍を遂げた。

南九州の覇者から九州の覇者に至るまでは容易な道のりではなく，貴久も父と共に一族の攻撃を受け清水城より追われている。後，南薩摩を固めることに専念，鹿児島城内を根城に実力を発揮，大隅半島の各氏を攻略して薩・隅・日の統一を着実に進めていった。その子義久(よしひさ)は器が大きく，九州を制圧した後，豊臣秀吉，徳川家康のもとで戦国大名から近世大名への発展を可能にした。

# ●信長関連年譜

## 2. 信 長 関 連 年 譜

| 西　暦 | 年　号 | 齢 | 事　　　　項 |
|---|---|---|---|
| 1534 | 天文 3 | 1 | 尾張勝幡城主，織田信秀の三男として那古野城に生まれる。幼名吉法師。 |
| 1537 | 天文 6 | 4 | 豊臣秀吉，誕生。 |
| 1542 | 天文 11 | 9 | 徳川家康，誕生。 |
| 1546 | 天文 15 | 13 | 元服。織田三郎信長と名乗る。 |
| 1547 | 天文 16 | 14 | 三河の吉良大浜に初陣を遂げる。 |
| 1548 | 天文 17 | 15 | 父信秀，美濃の斉藤道三と講和する。信長，道三の娘濃姫と政略結婚。 |
| 1551 | 天文 20 | 18 | 父信秀，病没。信長が跡を継ぐ。 |
| 1553 | 天文 22 | 20 | 後見役，平手政秀自刃。信長の素行を諌めたものと解釈される。斉藤道三と聖徳寺にて会見。道三はその器量に舌を巻いた。 |
| 1555 | 弘治 1 | 22 | 織田彦五郎を討ち，一族を討伐。尾張統一をすすめる。清洲城に入城。 |
| 1556 | 弘治 2 | 23 | 斉藤道三，子義竜と戦って長良川にて討死。 |
| 1557 | 弘治 3 | 24 | 尾張平定の為に，弟信行を清洲城に誘殺。 |
| 1559 | 永禄 2 | 26 | 上洛し，将軍足利義輝に謁見する。岩倉城の織田信安を倒し，ほぼ尾張を平らげる。 |
| 1560 | 永禄 3 | 27 | 桶狭間の戦い。田楽狭間２万５千の今川義元勢を討つ。奇襲戦の典型といわれる。西美濃へ出兵，斉藤義竜と戦う。 |
| 1562 | 永禄 5 | 29 | 徳川家康と同盟を結ぶ。 |
| 1563 | 永禄 6 | 30 | 徳姫と，家康の嫡子信康婚約。小牧山城へ移る。 |
| 1564 | 永禄 7 | 31 | 妹お市を浅井長政に嫁がせ，同盟を図る。 |
| 1565 | 永禄 8 | 32 | 武田信玄の子勝頼と養女の婚儀。 |
| 1566 | 永禄 9 | 33 | 豊臣秀吉，墨俣一夜城を築く。 |
| 1567 | 永禄 10 | 34 | 稲葉山城を落とし，美濃の斉藤竜興を追放。居城を稲葉山へ移し，岐阜と改称。楽市令を下す。 |
| 1568 | 永禄 11 | 35 | 将軍義昭を奉じて入京。北伊勢平定。関所の撤廃。 |
| 1569 | 永禄 12 | 36 | 二条御所の造営。撰銭令を公布。 |
| 1570 | 元亀 1 | 37 | 姉川の合戦。織田・徳川連合軍が浅倉・浅井連合軍を破る。石山本願寺挙兵。六角承禎降伏。 |

| 西暦 | 年号 | 齢 | 事項 |
|---|---|---|---|
| 1571 | 元亀 2 | 38 | 伊勢長島の一向一揆を攻撃。比叡山延暦寺を焼き討ちにする。 |
| 1572 | 元亀 3 | 39 | 将軍義昭に異見十七カ条をつきつける。武田信玄，三方が原にて徳川家康を破る。 |
| 1573 | 天正 1 | 40 | 義昭が謀反を起こす。武田信玄病死。義昭を追放，室町幕府が滅亡する。一乗谷城にて朝倉義景，小谷城にて浅井長政両氏を滅ぼす。 |
| 1574 | 天正 2 | 41 | 伊勢長島の一向一揆を大虐殺。 |
| 1575 | 天正 3 | 42 | 長篠の合戦。武田勝頼の軍勢を破る。鉄砲隊を巧みに利用した信長・家康連合軍の圧勝に終わった。越前の一向一揆平定。本願寺と和睦。 |
| 1576 | 天正 4 | 43 | 安土城築城。岐阜より移る。この年4月より，5年間に及ぶ石山本願寺との戦いの火ぶたが切って落とされた。 |
| 1577 | 天正 5 | 44 | 鉄砲集団雑賀一揆の掃討。安土城下の楽市楽座。松永久秀征伐。 |
| 1578 | 天正 6 | 45 | 上杉謙信没。安土城天守閣完成。 |
| 1580 | 天正 8 | 47 | 播磨三木城の別所長治自刃。石山本願寺が降伏し，これを焼き払う（石山合戦)。指出検地の施行。 |
| 1581 | 天正 9 | 48 | 高野聖の虐殺。キリスト教及びその宣教師を保護，耶蘇学校を建てる。 |
| 1582 | 天正 10 | 49 | 木曽義昌の先導により天目山にて武田氏を滅ぼす。勝頼自刃。家康が安土にのぼる。中国出陣を決定，6月，本能寺の変。明智光秀の刃に倒れる。享年49歳。子信忠も二条城で討死。秀吉，直ちに毛利と和を結び姫路へ戻る。11日後，山崎の戦いで光秀，秀吉に破れ，世にいう三日天下となる。清洲会議。秀吉と柴田勝家の対立。 |
| 1583 | 天正 11 | | 賤ケ岳の決戦。秀吉，信長の忠臣勝家を滅ぼす。前田利家の降伏，北陸平定。 |
| 1585 | 天正 13 | | 秀吉，富山城主佐々成政を征伐，越中平定の完了。後，四国に遠征，長宗我部元親を討つ。 |
| 1587 | 天正 15 | | 秀吉，九州平定の終了。島津義久の降伏。 |
| 1590 | 天正 18 | | 小田原の北条氏政と豊臣秀吉の戦い（小田原合戦)。秀吉，関東を従え，文字どおりその覇権を確立する。 |

# ●覇者への道

シブサワ・コウ著

人間五十年
下天の内を
くらぶれば
夢幻の
ごとくなり
一度生を受け
滅せぬ者の
有るべきか

## プロローグ

福井市街を出たバスは，およそ1時間で一乗谷川沿いの美濃街道に深く分け入り，やがて一乗谷のささやかな集落に着く。いまは山間の平凡な村にすぎないが，ここはかつて，豪壮な朝倉義景の館を中心に，多くの武家屋敷が立ち並び，朝倉一族が栄華を誇った歴史的に由緒のある土地だ。戦国時代の越前一乗谷といえば，小京都と呼ばれて，貴族的文化がはなやかに咲き匂う地方都市として知られていた。ここには，一時，のちに最後の足利将軍となる足利義昭も義景を頼って身を寄せたことがあり，義昭について来た細川藤孝（のちの幽斎）や,世に出る前の明智光秀も，この狭い城下に浪々の身をひそめ，天下の形勢をうかがっていたのである。

「彼らが吸ったのと同じ風を，私もいま呼吸しているのだな」と，歴史のロマンにひたりながら，筆者は，この滅びてしまった栄華の跡を歩き回った。ことし（1986年）1月中旬のことである。歴史の舞台となった土地を歩くのが好きで，カメラと文庫判の歴史小説をたずさえて史跡を訪ねるのを楽しみとする筆者は，ここ数年のあいだに，その大半を回り終えたが，一乗谷を訪れるのは初めてである。

名勝に指定されている，ぜいたくをきわめた庭園が，わずかに往時を偲ばせると案内書には書かれていたが，ことしの大雪は，それもこれもすべてのものを被いつくし，あたりはひたすら寂しく，雪風がヒュウと吹いた。

**一乗谷朝倉館跡**

なにもない。ここには朝倉の繁栄を偲ばせるものはなにもない。ただ，朝倉館の跡地に後年，豊臣秀吉が朝倉氏の供養のために，伏見桃山城から移築したと伝える唐門が雪の中にひっそりと立っているばかりだ。白一色のまばゆいような廃墟のなかで，そのくすんだ建造物だけは，かすかに朝倉のかつての隆盛をかいま見させてくれるのであった。

そうだ。ここは天正元年（1573），天下統一をめざす織田信長によって滅ぼされてしまったのだった。城郭や神社仏閣を焼く火は，3日にわたって燃え続けたという。雪のなかにたた

ずんで朝倉氏の滅亡の日の思いをめぐらせているうちに，あたりをしだいに闇が包みはじめ，風が強まり，雪が激しくなってきた。福井の宿に帰って，名産の越前蟹(えちぜんがに)でもむしりながら，あらためて，信長の覇者(はしゃ)への波乱の生涯をたどりなおしてみよう。

そういえば，もともと織田家は，その遠い先祖が福井の近くから出て，尾張に住み着いたのではなかったか？

## 尾張のウツケ者

室町時代の尾張・越前の守護職は斯波(しば)氏である。その守護代が織田氏で，織田の家は2系統に分かれていた。その一方の清洲(きよす)の織田大和守の系統の三老臣を，清洲三奉行と呼んだ。三奉行のひとつが信長の生まれた家系である。父は備後守信秀(びんごのかみのぶひで)。彼は，現在の愛知県津島を根拠地とした。津島は，当時，尾張有数の商業港で，伊勢湾貿易の中心として栄えていた。その豊かな経済的基盤が，織田氏の繁栄を支えたと思われる。

しだいに明らかになってくるはずだが，信長は，その生涯を通じて，ただ領土的野心だけで他国を攻め盗(と)ったとは考えられない。この時期に発展してくる商業経済に目をつけ，経済的利益の追求のために兵を動かしたと思える点も多い。歴史学者の鈴木良一氏などは，織田信長を経済人として見る視点を強調しておられるほどだ。その素地は，おそらく彼の生まれた環境と無縁ではあるまい。

信長は，天文3年（1534）3月，信秀の3男として那古野(なごや)（現在の名古屋）城で生まれた。幼名，吉法師(きっぽうし)。信長は生涯をそのカンの強い激しい気性で押し渡ってゆくが，赤ん坊のころからすでにその片鱗(へんりん)を見せており，乳母の乳首を噛(か)み破ってしまうので，乳母が何人も交替したほどであったという。

信長の少年時代は，父の信秀が，やがて信長に滅ぼされる，親子二代の宿敵，駿河(するが)の今川義元(よしもと)や，美濃(みの)の斎藤道三(さいとうどうさん)と激しく争っていた。戦雲ただよう中，13歳で元服(げんぷく)，三郎信長を名のる。翌年，三河大浜に初陣(ういじん)。後見役は守(も)り役(やく)の平手政秀であった。

それにしても，尾張の若殿信長の粗暴な奇行は目にあまるものがあった。腰に朱色の大刀をぶっこみ，髪も衣服もくずれ，道を歩きながらものを食らい，女をからかい，そのため，尾張のウツケ者と陰口される始末だ。しかし，武術の鍛練(たんれん)だけは怠らなかった。

天文17年（1548），信秀と斎藤道三のあいだで講和が成立し，翌年，信長は斎藤道三の娘，濃姫(のうひめ)を妻に迎える。織田・斎藤の講和をはかったのは平手政秀で，お濃を信長の嫁にと画策(かくさく)したのも，彼であろう。信長16歳，お濃10歳。典型的な政略結婚である。

天文20年（1551），信長18歳の年，父の信秀が病気で死ぬ。父の葬儀のときの信長の振る舞いも，ウツケ者のあだ名どおり，ひどいものであった。時間に遅れて，例のとおりの異様な格好で式場に現れた彼は，父の霊前に足音も高く進み出て，抹香(まっこう)を手づかみにして父のいはいにはっしと投げつけたのである。この行為は，ほんとうに信長がウツケだったからだとも，父への彼らしい精一杯の愛情の表現だったとも，近国を欺(あざむ)くための計略だったとも，見方はまちまちである。信長の秘書だった太田牛一の『信長公記』という書物があり，本稿もそれによるところが多いが，そのなかに，これを目撃した旅の僧呂が

「あれこそ，乱世に国を保つおひとじゃ」とつぶやいたという話が書かれている。しかし，守り役の平手政秀の目にはそうは映らなかったのか，死んで諌言しようと腹を切ってしまう（天文 22 年）。だが，それによって信長の素行が改まった形跡はない。

父の死によって，信長は 2 人の兄をさしおいて家督を相続した。

信長の才能をいちはやく見抜いたのは，むしろ，しゅうとの斎藤道三であった。道三は，娘婿の信長の器量をたしかめるために，信長との会見を申し入れてきた。会見の場所に向かう信長は例の異様な姿である。供のものには長い槍 500 本，鉄砲 500 丁をかつがせた。物陰からこの様子を盗み見た斎藤道三は，槍の長さと鉄砲の数の多さにやや不愉快そうな顔つきを見せたが，「噂どおりのウツケぶりよ」と，自国美濃の安泰のために安心したような表情をあらわした。さて，会見のために設けられた部屋に通ってみると，信長は，髪をなおし，衣服も改め，堂々たる若殿ぶりであった。道三は，「残念ながら，わしの息子共はあのウツケ者の門外に馬をつなぐことになるだろう」といった。門外に馬をつなぐというのは，家来になるという意味である。彼の予言はのちに的中した。

ここで注意しておかなければならないのは，信長がすでに 500 丁もの鉄砲を貯えていたことである。旧式の戦術にあきたらず，新しい戦法を工夫しようとしてゆく彼のアイディア豊かな斬新さは，のち長篠での武田勝頼との決戦で遺憾なく発揮されるのである。

このころ，織田家では血で血を洗う複雑な内部紛争がつづき，信長は清洲城を乗っ取ったり，弟の信行を謀殺したりしているが，これも尾張平定のためのやむを得ない犠牲であった。しかし一方では，尾張平野の農村地帯の進歩に対応するために，各所に堤防をつくり，治水に心がけ，領民の生産条件を整備することもおこたらなかった。彼が単なる乱暴者ではなかったことがわかる。

近国の情勢は，父の生きているころよりもいっそう悪くなっていた。美濃では，斎藤道三が嫡男の義龍と戦って敗死したため，従来からの両家の友好同盟関係が崩れ，一触即発の危機をはらんでいた。駿河には今川義元があって，上洛の機会をねらっている。

## 奇襲・桶狭間

筆者は，かつて清洲城跡から熱田神宮をへて桶狭間までの道を車で走ってみたことがある。この道は，永禄 3 年（1560），織田信長が「天下布武」への第一歩として，今川義元との一戦にのぞむために，桶狭間に向かって馬を駆けさせた道である。交通渋滞で，筆者はなかなか目的地に着けなかったが，当時は，馬で駆ければそう困難なみちのりではなかったはずである。距離にして約 10 キロ。

今川義元は，足利将軍家に血がつながる名門である。戦国動乱のこの時代，彼もまた，京に駆けのぼって天下に号令する野心に燃えていたのはもちろんである。その時，障害となるのは，途上に立ち塞がっている織田である。尾張を駆け抜け，織田を一蹴する意気込みで今川義元が兵を動かし始めたのは，その年 5 月，梅雨のさなかである。兵力はおよそ 2 万 5 千。

織田信長にも誇りというものがあった。むざむざ駿河の軍勢に尾張の地を踏ませるわけ

にはいかないのである。が，今川義元の諸隊は威風堂々と京を目指して進軍をつづけつつあった。

清州城から桶狭間方面をうかがう、出陣直前の信長像(清洲城趾)

織田方で動員できる兵力は2千にすぎない。真正面からの遭遇戦になればひとたまりもあるまい。屈服するか立って戦うか，籠城か敗北か，決断の時であった。清洲城内では，重臣を集めて評定が開かれた。籠城説が有力だった。しかし，信長の決心はすでに決まっていた。

奇襲！である。

その夜，がばと跳ね起きた信長は，「人間五十年，下天の内をくらぶれば，夢まぼろしのごとくなり。ひとたび生を得て，滅せぬ者のあるべきか」

と舞いおさめて，

「馬ひけいっ」

わずか数騎で城を飛び出して行った。

途中，熱田神宮に立ち寄る。古い秩序を否定し，合理精神のかたまりのような織田信長も，この時ばかりは神仏にすがるような気持ちだったのか，神前で戦勝を祈願している。そのころには，部下も追いついてきた。

義元は田楽狭間に本陣を置き，部下に昼食を取らせていた。狭間というのは細い谷間のような地形である。将兵たちは，縦に細く長い列をなして座りこむしかなく，無防備な状態で飯を食っていた。そのもろい横腹を突かれればひとたまりもあるまい。

現在の桶狭間（田楽狭間）古戦場趾

折からの梅雨どき特有の激しい雨といい，織田方をなめきった義元の油断といい，戦の神はこの時，信長に味方した。

「今ぞ！　かかれッ」

号令とともに乱戦になった。すさまじい突き合い，斬り合いであった。

本陣を急襲した織田方の服部小平太が義元に一番槍をつけ，たじ

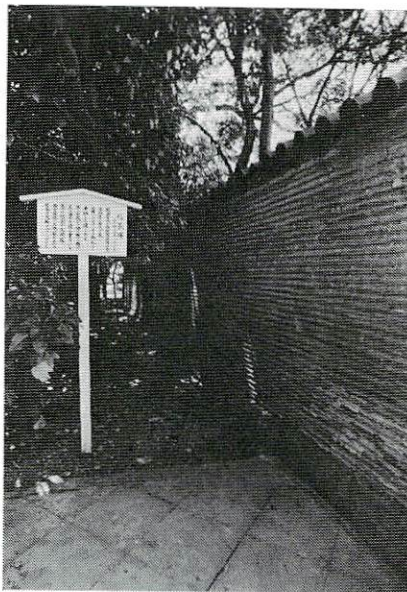
ろぐところへ毛利新介が襲いかかり，首をはねた。あっけない最期であった。

この合戦での今川方の戦死者はおよそ3千。この日以後，今川家はついに歴史の表面で再起することはできなかった。

戦に勝った信長は，感謝の気持ちをこめて熱田神宮に築地塀（ついじべい）を寄進した。それはいまも信長塀の名で境内に残っている。

天運もあった。周到な情報収集と信長の潔い決断もあった。乱世の英雄，信長の「光栄」ある第一歩はこのようにして踏み出されたのであった。

当時，松平元康（まつだいらもとやす）（のちの徳川家康）は今川家の人質として囚われていたが，彼は，この時，今川の支配を脱し岡崎城に帰って独立，徳川家の基礎を開くあしがかりをつかむ。

信長塀

## 遠交近攻

「孫子の兵法」にいう。「遠い国とは交わり近い国は攻めよ」と。

この時期の織田信長は，積極的にこれを実践した。まず，今川から自立したばかりの徳川家康と，娘を家康の嫡子信康に与えることを条件に清洲で同盟を結ぶ（永禄5年）。ちなみにこの同盟は，戦国乱世にはめずらしく，破約されることもなく有効に機能し，織田信長の死まで続いた。

さらに，近江の浅井長政（あさいながまさ）とも盟約を交わす。この時，織田信長は妹のお市（いち）を浅井長政に嫁がせた。史上，有名な政略結婚で，やがてお市や彼女が産んだ三人の娘達をめぐるさまざまな悲劇が歴史をいろどる。

甲斐の武田信玄や越後の上杉謙信とも同盟関係を結ぶ。

こうして後顧（こうこ）の憂（うれ）いをなくし，小牧山に城

岡崎城内の家康像

家康が生まれ、その居城にもなった岡崎城遠景

を築いて，信長は，ついに美濃攻めにかかるのである。美濃は，まむしといわれた斎藤道三が子の義龍に殺され，その義龍も病気で死んだあと，義龍の子の龍興（たつおき）が支配していた。

美濃には，美濃三人衆とよばれる重臣がいたが，彼らは，木下藤吉郎や謀臣・竹中半兵衛（たけなかはんべえ）の巧みな謀略によって，すでに織田方への内通を約束していた。龍興の無能に愛想をつかしていたともいう。

このころようやく頭角を現してくる木下藤吉郎が，墨俣（すのまた）に美濃総攻撃のための重要な拠点となる砦を築いている。これは，織田の重臣・柴田勝家（しばたかついえ）さえなし得なかった難工事であったが，彼は昔なじみの蜂須賀小六（はちすかころく）のひきいる土豪の一党を動員して，あっという間に完成させた。世にいう墨俣一夜城（いちやじょう）である。

こうして十分な準備をととのえたうえで，信長は一気に天然の要害・稲葉山城にこもる龍興を追放し（越前朝倉に逃げた），美濃奪取に成功したのであった。この時，この地を岐阜という名に改めた。有名な『天下布武』の印章はこのころから使われ始める。

## 流浪将軍・足利義昭（あしかがよしあき）

このころ，足利13代将軍義輝が，松永久秀らによって殺されるという前代未聞の事件が起きた。いかに下剋上（げこくじょう）の時代とはいいながら，現職の将軍が臣下に討たれるなどということはあり得るべきことではなく，将軍家の権威（けんい）がまったく地に落ちてしまっていたことの証拠である。それでも，やはり将軍の地位は魅力のあるものなのか，義輝の弟で奈良興福寺一乗院にあった覚慶（のちの足利義昭）は，兄・義輝の仇を報じるとして，細川藤孝らに助

けられて寺を脱出，将軍職就任へ向けてさまざまに策謀をこらしはじめていた。

足利義昭は，初め越前一乗谷の朝倉義景のもとに身を寄せて，上杉謙信や武田信玄に上洛の援助をするよう要請するが，両者ともに動かず，また，当の朝倉さえ腰を上げようとしない。それぞれに動くに動けない領国の事情というものがあるのだ。

が，信長にとっては，義昭はまたとない権威づけのための切り札であった。足利将軍家の正統を押し立てて京に旗を進めるとなれば，信長の大義名分が立つというものである。信長は，足利義昭への援助を快諾する。

永禄11年（1568），7月27日，信長と足利義昭，美濃で会見。

9月26日，信長，義昭を奉じて京に入る。

10月18日，義昭，待望の征夷大将軍に任命。

この急テンポで進む事態の進展を見ると，そこには信長のなみなみならぬ工作と後押しがあったことがうかがわれる。事実，義昭は，信長の勲功によほど感激したのか，信長を「御父」と呼び，足利尊氏が朝廷から拝領した，由緒のある「桐」の紋を彼に与えている。よく，織田家の紋は桐ではないのではないかという質問を受けるが，実はこういう事情があるわけで，没後1年めに描かれ，信長の肖像として最も信頼できるといわれる愛知県豊田市の長興寺所蔵の画像には，はっきりと桐の紋が描かれていることを，念のため書き添えておく。（戦国武将列伝表紙参照）

この時，足利義昭は，信長に副将軍に就任するよう要請したが，信長はこれを辞退するかわりに，商業経済・物品流通の中心地である堺・大津・草津に代官を置かせてほしいと頼み，許されている。信長は，これらの地の持つ経済的な利点に目をつけ，名を捨てて実を取ったのであった。経済人信長の目の鋭さであろう。さらに，自由な往来を保証して商業活動を活発にさせるため，関所を撤廃し，「楽市楽座」を宣言するなど，着々と経済人としての政策も押し進めていった。

足利義昭のために二条城を建ててやるなどサービスにもつとめたが，信長にとって義昭などはしょせん操り人形にすぎない。2人の一見親密な関係もそのあたりまでで，やがて2人は血みどろの戦いを演ずることになり，足利義昭はあちらの大名こちらの大名と放浪の後半生を送る羽目になり，流浪将軍などともいわれる。

この前後，信長の天下制覇への戦いは，主として越前の朝倉，近江の浅井との血戦に費やされる。

足利義昭を将軍にしてやった信長は，「天下は今のところ静かに治まっている」と自信のほどを見せ，諸大名にたいして，京に上ってくるよううながした。自分の勢威を天下に誇って見せたい気持ちもあったろう。

だが，再三の催促に対しても，朝倉義景は一向に応じようとせず，黙殺した。彼には「なんの，成り上がりものの織田ごときに」という思い上がりが強い。それのみか，ようやく信長が自分をカイライとしてしか見ていないことに気づいた足利義昭と裏で結んで，とかく反抗的な態度を取る。信長はついに朝倉討伐の軍を起こし，越前へ向かって進発した。

この時，信長のまったく予想もしなかったことが起こった。浅井長政の信長への離反である。信長にすれば，妹のお市まで与えて結束を固めてあったはずの浅井長政が背くなど，

想像もできなかったかも知れない。

しかし，浅井長政は，血の縁よりも，武将としての信義を重んじたもののようだ。浅井氏は，古くから朝倉氏の援助を受けて発展してきた恩義があり，また，信長と同盟した時には，もし信長が朝倉を攻撃するような場合は，事前に浅井長政の了解を得なければならないという一条があった。長政とすれば，信長の越前侵攻は違約であり，背信行為ではないかというわけであろう。

越前の地にいて，背後の近江で浅井に蜂起されては，たちまち退路を断たれることになる。信長は，一目散に京へ逃げ帰る。この撤退作戦のとき，最も困難といわれる殿軍をつとめたのが，木下藤吉郎の部隊。

元亀元年（1570）5月，軍勢を立て直した信長は，同盟者の徳川家康の援軍を得て，近江へ出撃していった。織田・徳川連合軍3万4千，浅井・朝倉連合軍1万8千が，姉川をはさんで向き合った。世に言う「姉川の合戦」だ。6月28日，午前5時に始まった激戦は午後2時にまでおよび，まず朝倉軍が徳川家康軍に敗れて退却を始め，ついで浅井軍が総崩れとなる。

姉川戦死者の供養碑。姉川古戦場も今は静かな田園地帯
背後にかすむのは、伊吹山。

いま，姉川のほとりに立ってみると，東に伊吹山や関ケ原をのぞむこの辺り，静かな田園風景を見せてくれるばかりだが，両軍の死者は合わせて2,500人，血原などという地名も残り，戦没者をとむらう巨大な石碑が，往時を物語っている。

信長は，敢えて深追いせず，長政のこもる小谷城をのぞむ虎御前山砦と横山城に木下藤吉郎を残して，いったん岐阜に引き上げた。

ところで，信長は，宗教というものに対してひどく冷淡であった。というより，むしろこれを憎んでいた。それは，ひとつには，偶像を破壊し，因習を打破しようとする彼の近代的とさえ言える合理主義精神のせいでもあるが，ひとつには，彼がその全国制覇の過程で，宗教の（とくに仏教の）教団によってしばしば悩まされたことが挙げられよう。彼は，

その後も長く石山本願寺や伊勢長島の一向一揆と戦いつづけなければならないのだが，姉川合戦のころにも，浅井・朝倉連合軍と緊密な連絡を取り合っている石山本願寺との対決に勢力をさかれ，さらに，浅井・朝倉びいきの比叡山延暦寺とも戦わなければならなかった。

とくに，叡山焼き討ちは史上に名高い事件である。「味方するなら許す。せめて中立を守れ。さもなければ全山を焼き滅ぼす」という脅迫にも，叡山側は，屈しなかった。そこで，信長は，明智光秀らの諫止も聞かず，叡山への徹底的な弾圧に乗り出した。根本中堂はもとより5百におよぶ堂塔ことごとくに火をかけて灰にし，僧俗男女3千人の首をはねた。「仏法破滅」と非難された残虐な暴挙である。元亀2年（1571）9月のことであった。

比叡山根本中堂

このころ，石山本願寺と連絡のある甲斐の武田信玄の上洛の動きが活発化した。盟約にもとづいて，織田からも兵を出してあったが，徳川家康が，三方ケ原で武田信玄2万5千の兵を迎え討とうとして完敗，命からがら浜松城に逃げ帰ったという悲報も届く。これに対する対策も必要であったし，松永久秀も信長に敵対しはじめ，一向一揆の策動もあわただしく，解決しなければならないさまざまな問題が山積してきた。

そうした逆境にあっても，信長はなおも積極果敢であった。武田信玄が三河の野田城を落として上洛中であるとの報を受けて強気に転じて，一連の動きを陰で操っているらしい義昭の非をなじり，ついには，二条城に義昭を囲み，宇治に追放してしまう。

……好運はまだ信長を見放していなかったようだ。武田信玄が，壮途半ばにして，伊那の駒場であっけなく陣没してしまうのである。京を目指しながら，上杉謙信との戦いに明け暮れ，やっと京に上れるという場面での無念の死である。

心配の種がひとつ減った信長は，宇治に足利義昭を攻める。義昭は，信長に子の義尋を人質に差し出し，遠く西国毛利を頼って落ちてゆく。毛利輝元や小早川隆景の援助を求めての亡命生活だ。その後も，事ごとに信長に刃向かってゆくものの，足利氏の室町幕府は，事実上，この時をもって滅んだのである。時に，天正元年（1573）7月。

## 哀し，浅井三姉妹

浅井方では，そのころすでに多くの武将が織田方に寝返っていた。おそらく木下藤吉郎（羽柴秀吉）あたりの調略によるものであろう。天正元年8月，今度こそ浅井・朝倉連合軍を撃ち破るべく，信長は近江に軍勢を入れ，13日，まず朝倉勢をたたきにたたいた。

朝倉方の敗軍は越前一乗谷に向けて退却し，ついにその本拠である一乗谷をさえ支える ことができず，義景は，一族の朝倉景鏡にも裏切られて，越前大野で切腹，ここに北陸の名門朝倉家は滅亡したのであった。

朝倉氏が滅んだ以上，援軍は期待できない。浅井長政の小谷城は風前の灯であった。信長と羽柴秀吉の軍が，京極丸といわれる城の中心部に猛攻をしかけ，ついに浅井長政を自刃に追い込む。長政，時に，29歳。嫡男の万福丸は，叔父信長によって関ケ原ではりつけにされた。

小谷城に滅んだ浅井氏と家臣の供養塔

落城寸前に，お市と，彼女が産んだ3人の娘茶々・初・お江は，炎の中から救い出され，信長のもとに送られた。お市はのちに柴田勝家と再婚し越前北の庄（現在の福井市）に住むが，信長の死後，羽柴秀吉が柴田を滅ぼした際，勝家とともに，焼け落ちてゆく城と運命を共にする。3人の娘は，ふたたび，城を焼く火を幼い目に刻みつけながら，羽柴秀吉に引き取られていった。

茶々はのちの豊臣秀吉の側室淀どのであり，初は京極高次夫人，お江は徳川二代将軍秀忠夫人である。3人は，その後いずれも戦国動乱の嵐にもてあそばれ，それぞれに数奇な運命を歩いて，哀しく，また，美しい物語りをつむいでゆくのだが，しかしそれは本稿の直接の目的ではなく，時代も少しあとのことになる。ここでは，荒々しい男達の争いの陰に，こういう哀しいおんな達のドラマもあったことを言い添えておくにとどめたい。

翌天正2年（1574），岐阜でひさかたぶりの平穏な正月を迎えた信長は，参賀の諸臣が目をむくような「珍奇のもてなし」をした。浅井長政や朝倉義景のドクロに金箔を塗ったものを盃に，一同に酒をふるまったのである。信長の残酷好みを語るエピソードだ。

この年，伊勢長島の一向一揆の大虐殺も敢行した。男女2万人が焼き殺されたという。長年，しぶとい抵抗を示した一揆もついに息の根を止められてしまった。

信長は国盗りへ向けて，一歩一歩，大股な足取りでこの時代を歩いていった。

## 鉄砲の時代

鉄砲が日本の歴史を大きく変えた事件が史上ふたつある。ひとつは，長篠合戦での信長の銃による新戦法であり，ひとつは，幕末の戊辰戦争での旧幕府軍と新政府軍とのあいだの武力衝突である。旧式銃しかもたない幕軍は，圧倒的な量の新式銃をもつ政府軍に手も足も出ずに撃ち負かされてゆく。明治維新を成功させたのは，政府軍の誇る火器の威力で

あったとさえいわれる。

さて，信長の鉄砲戦だ。

信玄の死によって鳴りをひそめていた甲斐の武田は，石山本願寺にうながされて，勝頼が三河方面に進出してきた。前年，徳川家康方の遠州・高天神城を攻めてこれを奪取した余勢をかっての軍事行動である。奥平貞昌の守る徳川方の城・長篠城を攻めたてた。これはたたいておかなければならなかった。

同盟の約束にしたがって，信長は，徳川家康との連合軍を編成し，決戦の地へ向かった。両軍の会戦地は，長篠・設楽原。

天正3年5月21日午前6時開戦。織・徳連合軍の兵力はおよそ3万，対する武田勝頼軍は1万4千。連子川をはさんで両軍の将兵がせまい盆地にひしめきあった。連合軍側には鉄砲3千丁があり，これを千丁ずつ3隊に分け，1段めが発射するあいだに，2段めは点火して射撃の構えにはいっており，3段めは弾をこめているという「3段装填法」を採用した。これによって，弾は切れ目なく連射することができる。しかも足軽銃手たちは馬防柵にしっかりと護られていて，精強を誇るさしもの武田騎馬軍団も，なすところなく壊滅的な打撃を受けた。「3段攻撃法」は，信長の考案したものだといわれ，彼の前例にとらわれない斬新なアイディア，自由な発想が事態を好転させ，戦国の合戦の形を大きく変え，歴史を転回させたのである。武田方の戦死者はおよそ1万。山県昌景のほか名のある武将もつぎつぎに足軽鉄砲隊によって撃ち倒され，武田勝頼は，主従わずか6騎で甲斐へ逃げ帰った。そして，この敗戦のショックで，武田はこの後数年，ほとんど起てなくなってしまう。

現在，設楽原の古戦場には，馬防柵が復元されて当時を偲ばせてくれる。

つづいて信長は，越前・加賀方面の一向一揆を討伐して，北陸方面へもしだいにその勢力を拡大していった。

秋になって，信長は明智光秀に丹波攻略を厳命する。

天正7年，光秀は，丹波の実力者・波多野秀治兄弟を討つために出兵する。光秀は八上城にこもる波多野軍を兵糧攻めにするのだが，らちがあかないので，母（じつは伯母）を人質に入れて和議をはかる。それを信じた波多野兄弟は城を出て降伏してくるのだが，信長は2人をはりつけにして殺してしまう。約束がちがうではないか，これはペテンだ，だまし討ちだと怒った城兵たちは，光秀が入れた人質の母を殺して徹底抗戦する。

この信長のやり方が光秀の恨みを買い，のちに明智光秀が信長に背く原因だという説もある。

天正4年（1576），信長は，丹羽長秀を奉行に起用して安土城を築かせた。名古屋，清洲，小牧山，岐阜と居城を移してきたが，美濃，尾張はもちろん，伊勢，越前，近江などへ勢力範囲が広がってくると，岐阜では東に寄りすぎているのと，北陸にあって京をにらんでいる上杉謙信への備えもあってここに城を築くことにしたのである。安土は京へも近く，上杉謙信が上洛するなら必ず通ると思われる北陸街道をにらんで，地の利を得ていた。

信長が備えようとした上杉謙信に，このころ石山本願寺が接近する。また，西国の毛利も本願寺に応援を約束している。その陰には，すでになんの実権もないが，謀略をこらす

安土城天守跡に残る石垣

ことだけは好きな，足利義昭の陰湿な影が見え隠れする。

さまざまな勢力が，信長を取り囲んで圧迫を加え，緊張がたかまっているのである。

この時期，信長の目はすでに西国に注がれていた。濃尾・畿内などを手中におさめた彼は，次の攻撃目標を中国の雄・毛利に向けていたのである。そのためには，瀬戸内海に進出しなければならない。畿内と経済的に切り離せない関係を持つ瀬戸内海の通商権を確保することは，これからの信長の全国制覇にとっても欠かすことのできない日程であった。瀬戸内海を押さえるには，大坂を占拠している石山本願寺と衝突してこれを排除することを避けるわけにはいかない。逆に毛利側にすれば，石山本願寺が敗れれば直接織田の脅威・重圧が加わってくる。

天正４年，木津川の河口で，織田の水軍と毛利の水軍が戦うという事件が起きている。瀬戸内海の海賊を主力に編成された毛利の水軍は，石山本願寺に兵糧を送り込むためにこの地に航行してきたものであった。信長の水軍は完全に敗れた。その苦い教訓をもとに，信長は強力な水軍の創設を命令した。こうしてできたのが，いわゆる九鬼水軍である。これから２年後の毛利水軍との再度の海戦では，こんどは鉄甲製の不沈戦艦を有する織田水軍が毛利水軍を撃ち破っている。

信長と石山本願寺とのいつ果てるとも知れない激しい抗争のなかで，つねに石山本願寺軍の中核として織田軍と戦ってきたのは，紀伊の雑賀衆であった。雑賀孫一で有名な彼らは，優秀な水軍と鉄砲とで知られ，さかんに信長軍を悩ませた。雑賀鉄砲衆ともいう。信長は，彼らを徹底的にたたいて降参させた。

## 西に向く目

この時期の信長はまるでモグラたたきをしているようなものであった。あちらをたたけば，こちらが頭を出す。こちらを打つとあちらで首を出す。

北陸では，上杉謙信が能登・加賀地方に進出してきた。柴田勝家を総大将に，滝川一益，羽柴秀吉，丹羽長秀，前田利家などが北陸へ大軍を動かすが，かえって上杉謙信に「口ほどにもなく弱い軍勢よ」とちょう笑される程度のいくさしかできない。「はねる謙信逃げるどぶ長（信長）」などという狂歌までできた。そうこうするうち，石山本願寺攻囲軍のかなめともいえる松永久秀が謀反を起こす。四方に強敵を抱え，文字通りの内憂外患で

あった。

ようやく久秀を討って自爆死させた織田軍は，今度こそは本腰を入れて丹波・中国地方の攻略に乗り出すことになった。丹波方面の戦況はすでに述べたとおりだが，播磨（はりま），中国地方に向かった羽柴秀吉は，毛利の支城である上月城は落としたものの，三木城主・別所長治には背かれ，てこずらされる。

毛利討伐の先陣として，羽柴秀吉が，中国方面で苦戦しているころ，大きな星がひとつ落ちた。信長の当面の敵であり，その存在を最も恐れ，警戒していた上杉謙信が脳卒中で死んだのである。武田信玄・上杉謙信の相次ぐ死は，信長の運の強さを物語る。巨大な北陸の脅威が除かれたことによって，信長は毛利氏との戦いに総力をあげることができる態勢になったのである。

その矢先，思いもかけない人物の謀反（むほん）が信長を激怒させる。摂津伊丹（せっついたみ）城主・荒木村重（あらきむらしげ）が石山本願寺・足利義昭・毛利輝元と通じて反信長の旗印を鮮明にしたのだ。しかしこれも抗戦ほぼ1年で村重が伊丹城を脱出，彼や家臣の妻子約130人が首をはねられるという悲惨な結末で幕を下ろす。そして，この件が引き金になったような形で，信長と石山本願寺とのあいだに講和が成立，長い，あまりにも長かった争いについに終止符がうたれたのであった。

天正10年（1582），安土の正月は，久し振りののどかな正月であった。しかし，閑静であったのはわずかひと月で，この2月1日には，武田勝頼を討つべく駒を甲斐・信濃に進めた。木曽義昌や穴山信君が信長に寝返り，武田攻めの手引きをするという情報が入ってきたのである。長篠合戦以来の7年ぶりの武田との対陣だ。

武田家は，もともと主従関係というより，豪族連合といったあいまいな形で成り立っている。その言わばソフトな構造は，武田信玄のような強烈な個性と指導力を持ったリーダーがいる場合は強みを発揮するが，そうでないとたちまち弱点をさらしてしまう。勝頼の悲劇はそこにあった。彼もけっして暗愚（あんぐ）な武将ではなかったが，創業の功臣たちは，2代目の彼に忠誠心を示しはしなかった。一族はばらばらになって瓦解（がかい）し，とうとう名門武田氏も，天目山で最期を迎えるのである。

筆者が，勝頼最期の地天目山を訪ねたのは，秋深い日であった。勝頼夫妻と嫡子・信勝が自害の座にしたと伝える「生害石（しょうがいいし）」や，3人を葬った墓石に淡い陽が注いでいた。作家の新田次郎氏が，かつてここを取材に訪れて，

　勝頼の涙のあられ石を打つ

と詠まれたのを思い出す。

武田の落日を象徴するかのように，華々しく戦って死ぬのは，勝頼の弟で高遠城主の仁科盛信ただひとりだった。

徳川家康にとって，武田は三方ケ原以来の憎い宿敵である。その武田を滅ぼし，駿河一国を与えてくれた信長に礼を述べるため，律義な徳川家康は安土まで出向いてきた。その供応役（きょうおうやく）をおおせつかったのが明智光秀。

そのころ，羽柴秀吉は中国地方にあって，毛利の最前戦を死守する清水宗治の備中（びっちゅう）高松城を囲み，これを攻めあぐんでいた。まもなく高松城水攻めという奇計をもって，城主・

秀吉の中国攻略の根拠地、姫路城

清水宗治に腹を切らせ起死回生の勝利をおさめるのだが，この時は，盛んに信長の来援を乞うている。このあたり，神経質でネクラな明智光秀などと違って，この人物，主君の心をつかむ術にたけていた。なんといってもかわいげがある。

## 天正10年6月1日

中国に出陣して秀吉の作戦を監督し，さらに長宗我部を討つため四国まで長駆するつもりで安土を出てきた信長は，たまたまその日は，茶会を催したため，わずかばかりの手勢と共に，彼の京での定宿である本能寺に宿泊していた。

明智光秀は，居城の亀山を出て，秀吉の中国攻め救援に向かう，はずであった。ところが，亀山から京へ入る途中の老の坂を越えたあたりで，全軍に向かって，

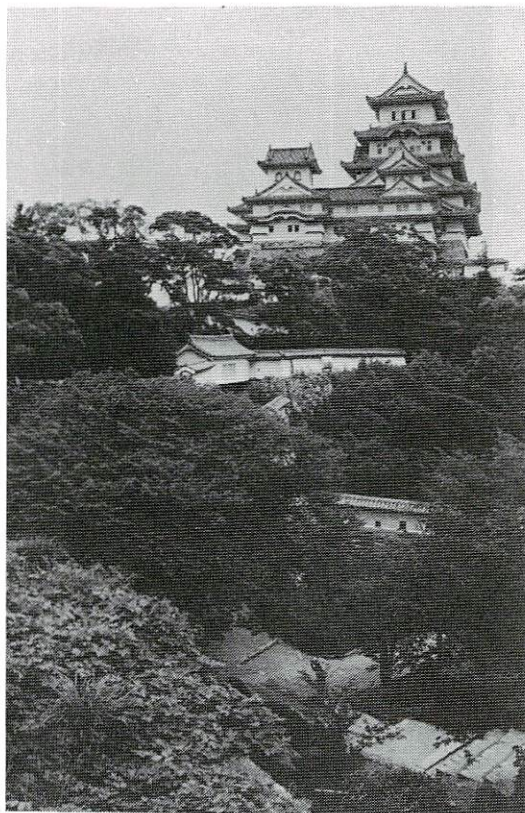
「わが敵は正に本能寺にあり」

と訴える。信長を討つという意味である。謀反，である。

明智光秀の軍勢が本能寺を囲んだのは，6月2日の未明であった。光秀指揮下の精鋭が鉄砲を撃ちかけ，喚声をあげて本能寺に乱入した。辺りの騒がしさに気づいた信長は，近習・森蘭丸に，「いかなる者ぞ」と尋ねている。蘭丸が「明智光秀の手の者と見えまする」と答えると，「推参なり。是非におよばず」と叫んだという。この短い言葉の中に，天下布武の壮図なかばで，この世を去ってゆく信長の思いが深々とこめられているようだ。

弓や槍を取って力戦したがついに力つき，一室にこもって腹を切った。没年，49歳。主君に殉じた蘭丸は18歳。

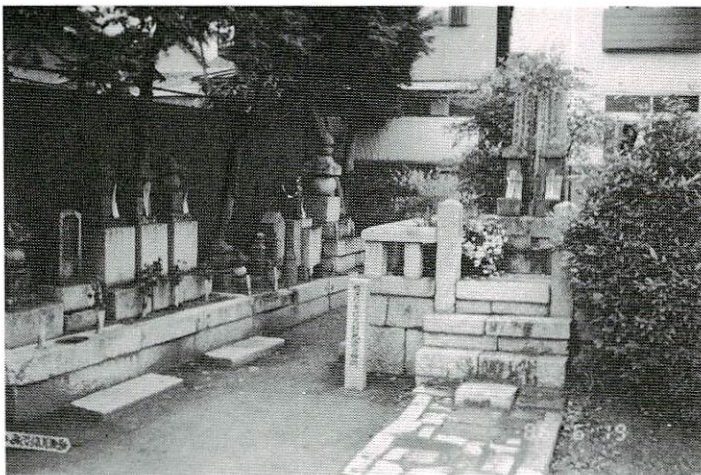
破壊と建設の勇者，乱世の英雄，経済がわかる新時代の政治家のあまりにもあっけない終末であった。遠大な信長の「企画」は，文字通り一朝にして壊滅した。

彼は，「人間五十年」とかねて口癖のように言ったが，まさに，それにふさわしい人生で

**当時の面影を偲ばせる本能寺**

あった。

（明智光秀の謀反の原因については，昔からさまざまな推測が重ねられてきた。丹波・近江の両国を，自分でこれから切り取ってこなければならない出雲・岩見に代えられそうになった不満。丹波攻めのとき，信長の暴挙が原因で母（伯母）を殺された怨恨。信長が，明智光秀の妻に横恋慕したという説。徳川家康供応の役を外された恨み。武田勝頼と内通したのが発覚しそうになった不安，など。結局，いちばん納得できるのは，彼にもまた，戦国の武将らしい，天下掌握の「野望」と夢があったのではないか，という推測だろう。ところで，はたしてこの人物に天下を取る器量と軍備と人望があったかどうかは，微妙な「ＩＦ」である）

## エピローグ

信長は，本能寺で，明智光秀によって「暗殺」に等しいかたちで殺された。彼の死は日本にとって大きな損失であったという人もある。信長の仕事は，まだ，これからだったのである。彼はかねてから，50で死んでもよいと達観していたから，死を恐れ，死ぬことを無念に感ずることはなかったであろう。しかし，天下布武・全国制覇の大業をなし得ないままこの世を去ることには，死に切れないものを感じつつ呼吸を止めたにちがいない。彼がこの時期までにほぼ掌握していたのは17ケ国である。（君にはできたか？）全国統一を果たす為には，50ケ国を切り取らなければならない。その中には，奥州の伊達，謙信亡しとはいえ北陸の上杉，関東の北条，中国の毛利，四国の長宗我部，九州の島津など手ごわい猛将・勇将がひしめきあっているのである。実際の歴史では，信長の遺志を継いで全国統一を成しとげてゆくのは，中国大返しといわれる長駆の反転（中国から駆け戻ってきたこと）で，山崎合戦に明智光秀を討った豊臣秀吉であり，その後を引き継いだ徳川

京都阿弥陀寺には織田信長と家臣の墓が眠る。
右が信長の墓。その奥には濃の墓がひかえる。
左にならぶ3つの墓は森蘭丸を始めとする小姓達のもの。

家康である。しかし，ここでは，君自身がなんらかの形で50ケ国を制覇しなければならないのである。

どんな方法で？

信長は本能寺で死んだ。しかし。「信長の野望」は達成させてやって欲しい。

そう，君が，「歴史を創る」のだ。

成功を祈る。

# 4. 参 考 文 献


| | |
|---|---|
| 戦国大名系譜人名事典（東国編・西国編） | 新人物往来社 |
| 戦国大名家臣団事典 | 新人物往来社 |
| 歴史読本戦国大名家系譜総覧 | 新人物往来社 |
| 日本の合戦（５・６・７） | 新人物往来社 |
| 歴史読本伝記シリーズ7 織田信長 | 新人物往来社 |
| 日本武将列伝（２・３・４） | 秋田書店 |
| 日本の歴史9 | 集英社 |
| 戦国人名辞典 | 吉川弘文館 |
| 織田信長 | 岩波新書 |
| 織田信長 | 角川文庫 |
| 織田信長 | 教養文庫 |